



竹内芦風 屏風二双の内の一雙 (金口家から寄贈)

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆

近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆

小林国二 小林善秋 高橋潔 加瀬由紀子
室賀清輝 近藤マリ子 近藤善信

後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さままでご覧ください

今年も宜しくお願ひ申し上げます

翠巖龍弘

団塊の世代が今年から定

年退職を迎えます。都会で生活をしている人達に今後の人生の夢を聞くと、出来ることなら自然豊かな田舎や漁村などで暮らしたいと願っている人が大勢おられるそうです。都会の便利さも然る事ながら人間も動物、自然に憧れるのも当然のこととは思いますが、それだけではないように思われます。私も今年には還暦を迎えました。そのせいか最近よく子供時代のが懐かしく思い出されます。現在の便利な生活に慣れきった者が昔に戻れることは何々無理なこととは思いますが、貧しかったが昔の方が何か夢があったり、活きている実感があつたと感じている人も多数いられるのではないのでしょうか。子供も家族の中では当にされ大事な仕事を任されて、存在感があつた

ように思われます。

私も朝課(朝のお経)が終わると、板間の雑巾がけ、かまどの火炊き、夕方は風呂炊き、強風の後は火種にするための枯れ枝や杉葉拾い、境内の草取り、拭き掃除など、仕事を与えられ、存在感と同時に自然を身近に感じていたように思います。遊びも年齢の上の子も下の子も一緒に駆けて回ったり、端木を使って何かを作ったりと、お金を使わずに自分たちで工夫したり、蟻の行列や蜘蛛の糸の巣作りに長時間にわたって興味をもって観つづけたりと、現在の子供からみると時間的にも気持ちの上でも「ゆとり」があり、伸び伸びしていたようです。

お正月やお祭りなどの特別の日の数少ない御馳走に大感激したりと、生活に減り張りがあつたと感じるは私だけでしょうか。自然に畏敬の念をもち、貧しかったが大人から子供までともに生きるという姿があつたように思われます。貧困は人間を不幸にしますが、経済的に豊かになれば幸福になれることでもありません。現在の日本では昔からみれば信じられないくらい豊かに、また生活が便利になりました。その反面、時間に追われ心にゆとりのない人も多く見受けられます。また、格差社会とも言われていますが、経済的に豊かな人達は幸福かというところとも限りません。人間豊かさにはきりがありません。日本人の多くの人が本来的に持っていた、自然に謙虚であり、大地に足をつけ、ともに生きるという姿勢が、平和で感動のある活きていると言ふ事を実感する生活になるのではないのでしょうか。

ある真実を教えることよりも、いつも真実をみいだすにはどうしなければならないかを教えることが問題なのだ。

【大本山總持寺 雲水日記】

總持寺で迎える最後の年末年始

近藤真弘

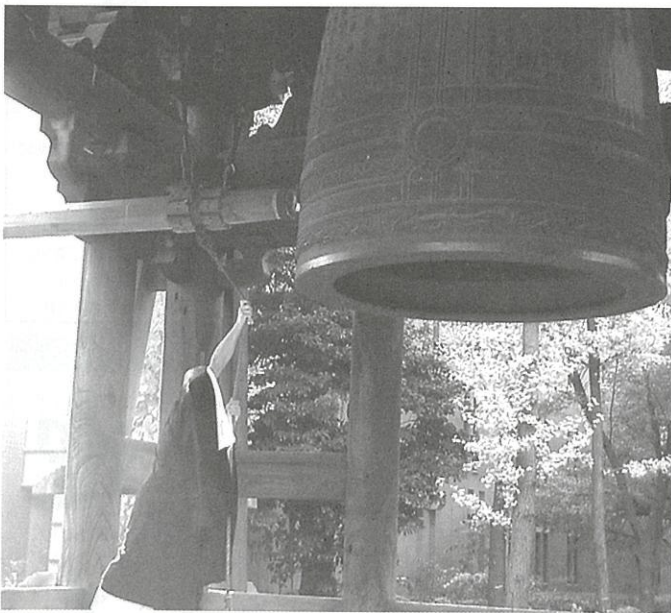


大祖堂内

とす大掃除のことですが、広大な總持寺すべての建物の煤を払うのは大変な作業です。いくつもある建物に修行僧がそれぞれ分かれ一日かけて行います。

あけましておめでとうございませう。
「はやいもので本山で迎える正月も五回目になりました」とこの修行日記で書いたと思つたらあつという間に一年が経ち六回目の正月を迎えました。
總持寺の年末から正月にかけては様々な行事が行われます。そんな年末の行事の一つに煤払いがあります。その年一年間の垢を落

私の担当は總持寺の中でも一番大きな建物である大祖堂と呼ばれるいわゆる本堂です。前にも紹介しましたがこの大祖堂は畳千畳敷きと呼ばれる大きさと、その広さもあります。それ以上に煤を払う際に大変だったのが天井の高さです。高いところは竹竿の先に竹の葉をくくりつけたもので埃を落とすのですが、一年分の埃となると綿のような埃が雪のように降ってきてあつという間に約千畳の畳の上は真っ黒な埃だらけになりました。しばらく時間を置いて埃を掃き畳を拭いて大掃除は完了しました。他にも歳末の助け合い托



大梵鐘

鉢や、餅つきなど正月に向けての諸準備をして大晦日の日を迎えます。
大晦日の日はいつもは開枕(就寝)が二十一時なのですが十八時開枕になります。そして二十三時に振鈴(起床)になりそこから年明けの行持が始まります。まずは大

梵鐘の撞初です。二十三分四十五分に大梵鐘の前で法要を勤めその後大梵鐘は参拝者によって打たれます。
大梵鐘で法要をあげるとその列は佛殿に向かいます。途中唐門という門の開門を行いそこから参拝者の行列は佛殿に向かいます。

佛殿で法要を行い最終的に参拝者は大祖堂に集まり、そこで新春の大祈禱法要がおこなわれます。
元旦から三箇日は数万人の参拝者が訪れ、總持寺の境内は賑わいます。山内のあちこちでは御祈禱が行われ祈禱太鼓の音が鳴り響いています。
こんな風にあわただしく過ぎる年末年始ですが、新たな年を迎えるうれしさや普段静寂な境内がおめでた



佛殿外観

い賑やかさに包まれるのは気持ちがよく、忙しさを忘れてあつという間に時間が過ぎていきます。
總持寺での年越しは今年が最後で、来年からは安善寺で新年を迎える予定です。
残りわずかな總持寺での修行生活になりました。今年はいろいろと新たな年になると思いますが、その時その時を大切に、振り返つたら良い一年だったと思える生活をしていきたいと思ひます。

先祖がのこしてくれた大切な宝物

長岡野菜

鈴木圭介



平成十年六月のこと。盛岡市で江沢正平氏とナス談義をした。江沢氏は日本の野菜界の水戸黄門様といわれ、当時八十五歳。京野菜に力を貸し、加賀野菜を仕掛けた張本人である。江沢さんはナスというの

は皮も実も柔らかいのがいいという。いやチョット待ってください。長岡には巾着ナスという蒸かして食べるシツカリした旨いナスがありますよ、と私。なかなか信用しないので七月下旬のある日、東京まで出かけ

て試食会を行った。

蒸かしナスやナス炒めなどを食べた江沢さん、長岡は城下町だろう。旨い野菜がもつとあるに違いない。お前、長岡野菜をやれよ！ 老人の気迫に乘せられてうっかり「ハイ！」。これがそもそものきっかけになったのだ。

そこで身のまわりの野菜を調べてみると、いままでも何気なしに食べていた野菜がいかに長岡独特で、しかもよそのものに比べて格段に旨いものがたくさんあることに気がついた。梨ナス、ズイキ、ゆうごう、里芋、香豆、体菜、長岡菜、神楽南蛮、おもしろいほか、だるま蓮根、糸瓜……

に出すのは笑止かつたのかもしれない。しかし、こういう地域独特のものこそ旅の衆が食べたがるものなのだ。

さて、長岡野菜のリスト作りを始めて妙なことに気がついた。年々生産量、出荷量が大変なスピードで減少しているのだ。これは大変だ、ヘタすると絶滅する物も出てくるぞ！

少しばかりあせりを感じながら、その理由を考えてみた。四十年前に始まった高度経済成長。そのおかげで物質的に随分豊になったこと



は事実であるが、失ったものも大きかった。爆発的な消費経済のもと、大量生産、大量販売の波は野菜の世界をも席巻した。作りやすくて形の揃う野菜へと品種改良がすすみ、農薬や化学肥料は使い放題。折から発展を続けるスーパーマーケットには、これら見てくれのいい野菜が主役を勤めるようになる。北海道から九州まで代わり映えのしない野菜が並び始めたのだ。

このような大量の野菜に包囲されては、私たちが先祖

から受け継いできた野菜が忘れ去られ、消滅する危機に陥るのも無理はない。こうした危機にいち早く反応したのが瓢亭や君の井などが京都の老舗料亭だった。このままでは京料理がダメになる……。三十五年ほど前、京野菜復活の兆しとなった。

その後、加賀野菜が江沢さんの勧めで始まり、今、長岡で伝統野菜が復権を果たした。私たちの後には福井、会津若松、大阪、名古屋、仙台、神戸など、全国あちこちで伝統野菜の復活運動が始まっている。

野菜は人とともに移動する。そして根付いた土地で食文化形成の主役を演じてきた。伝統野菜はまさにご先祖様がのこしてくれた大切な宝物であり、相続税のかからない偉大なる遺産なのだ。地域の野菜こそ文化そのものだと考えてもいいのではないか。皆様の応援を期待したい。

◆鈴木圭介氏
長岡市公設青果地方卸売市場
長岡中央青果株式会社
代表取締役社長（八百屋）

一人は米を食べる人、いま一人は米を作る人、食べる人は抽象的になり易く、作る人はいつも具体的事実にて生きる。

良寛文庫をご利用ください

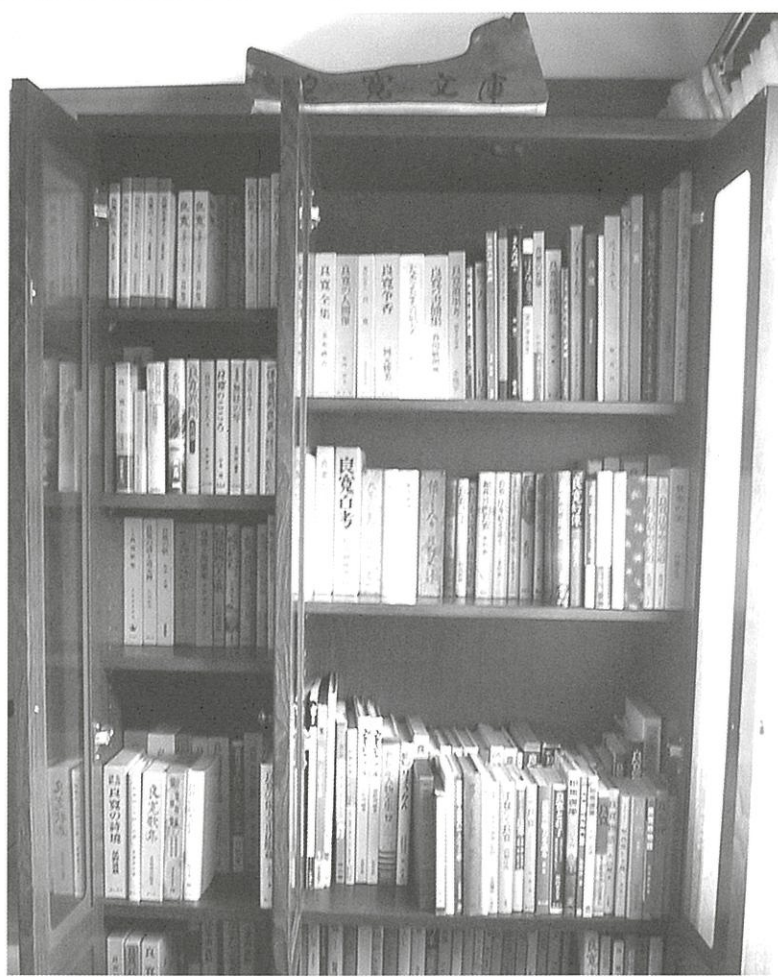
昨年十一月に突然ダンボ
ール箱十二ヶが宅急便で、
藤沢市在住の佐藤圭司様よ
り届けられました。私には
心当たりがなく、箱を見る
とそれぞれに番号がふって
ありましたので、一番の箱
を開けてみますと、「良寛」
関係の本と封筒に入った手

紙があり、お檀家筋の方か
らのものでした。

佐藤様は、元全国良寛会
の会長、近藤慶四郎様が東
京良寛会をつくられた時入
会され、それ以来良寛に関係
ある本を集められ、楽しい時
を過ごされたそうですが、
今後は長岡の多くの方々に

良寛関係の本に親しんでい
ただき、良寛さまの心に少
しでも近づいていただきた
いとの願いから安善寺に寄
付をさせていただきました。

早速、本堂に「良寛文庫」
として本箱を設置させてい
ただきました。子供向けか
ら良寛詩集、相馬御風、貞



心尼、良寛全集等々、良寛
さま関係三百冊以上の贈書
です。一人でも多くの方々
にご利用していただきたく
く、尚、本の貸し出しも予
定しておりますので、遠慮
なくお寺の方へお問い合わせ
ください。

お陰様で きれいに なって新年を 迎えられました



現代日本人の憧れる「良
寛さん」。良寛の本を通し
て私共も少しでも良寛さま
の心に近づきたいと願致
します。

毎年十二月第三土曜日
は安善寺の大掃除の日で
す。八月十七日は墓地大掃
除、十二月は本堂位牌堂・庫



裡・稲荷堂、ロソク立て
並びに香炉の灰の掃除、本
堂前境内(雪のない年)な
どの大掃除です。

昨年十二月十六日(土)
に毎年手伝いにていただ
くベテランの方々並びに山
内総出で、無事終了させて
いただき、新年を迎えるこ
とが出来ました。

写真は寒い中、一生懸命
に掃除をしている光景で
す。お手伝いをしていただ
いた方々に厚く御礼申し上
げます。

山主

読者からの 便り

遠い昔の思い出

長岡市川崎●星野忠次

昭和二十年八月十五日頃、当時北滿の桂木斯(松花江のほとり)に在隊。ソ聯が北方より突入して来たので師団命令で交戦することなく南方の吉林方面に撤退するようにとのこと。撤退途中に方正という処で師団より終戦の通報が到着、休憩しておりました。

ソ聯軍が追いついて武装解除を受けました。武士の情けか将校の軍刀は取り上げられませんでした。当時小生陸軍兵少尉でした。この直後爆音がして某伍長が自分の手榴弾で自爆したのです。戦陣訓にうたわれていた、生きて虜囚の恥ずかしめを受けるな、の実行をしたわけで、一同嘩然とし、とても悲しい出来事でした。

召集の古参将校が、これからは昔の鹿鳴館時代がやってきて自由になり、ダン

ス等も踊れるようになると思われた事が今でも鮮明に頭に残っています。ほんとうにその様に日本は自由な経済大国になりました。

それからソ聯軍の歩哨監視のもと、先程来た道を桂木斯の方に戻りました。途中、小高い山に立てこもっている日本の部隊がおりました。小生、ソ聯軍の使者となり軍刀に白旗をつけて、多数のソ聯軍が見守る中、山の部隊の方に駆けて行きました。距離は八百メートル位でしたが、山の部隊につくまで生きた気がしませんでした。

山の上に到くと、部隊長が待ちかまえていて、わかっているのだが余り残念なので手を上げずに抵抗しているのだと申されました。その後、その部隊も戦闘しないで武装解除を受けた様です。

私は山を下りて無事本隊と合流、行軍して桂木斯に戻り、少し滞在してから十月頃松花江を船で下り黒龍江に出てソ聯嶺に入り、軍都ハバロフスクに到着、収容所に入れられました。それから昭和二十二年四月の

復員まで抑留生活が始まったわけ。これも遠い昔の一ページです。

極寒零下四十度、カロリーの少ない食物、ノルマノルマの労働によく耐えて九死に一生で帰れたと思うこの頃です。因みに、関係者は六十万人人位抑留され、六万人程の尊い人命がシベリヤに失われたといわれています。抑留される前後を簡単に書きましたが、抑留生活の様子はまた別稿といたします。

いくさ人 虜囚を解かれて 六十年 平和な日本を有り難く思う。

もつと人間らしく
長岡市花園東●高橋利春
新年あけましておめでと
うございます。

三月二日で六十歳になります。まだまだ若いと思っ
ていたら、人から「還暦祝
してやるからね」などと話
しかけられ「そうか、六十
か」と改めて年齢を重ねたこ
とを感じざるを得ません。

しかし、昔の六十歳とい
うともつと年老いていたよ
うに子供心に感じていたの

は私だけであろうか。寿命も延びて元気に仕事やゴルフや酒にと、周囲の人達もみんな十歳は若く動きまわっている今日である。これも豊かな経済と安全な社会がそうさせてくれているのか。

“自分ならどうするの”
常に相手の身になって物事を考えるという一つの気持ちでこまできました。おかげさまで仕事も順調にきておりますが、最近のニュースにはちよつと気になる
ところがあります。

世の中IT時代に突入し、何でもパソコンだ、メールだと人と人が向き合つて話すことがなく物事が進み、ゲーム感覚で社会生活を送っている人間が多数いることです。キレる子供、大人までがキレてしまったなど、無責任な言葉です。人間が人としての常識、人を思いやる気持ちが薄らいで、考えられないような事件が起きていることです。また、それをメディアが取り上げて増幅ぎみに報道しているところもあります。



若い頃はコンピュータ(電子計算機)のパンチテープを継ぎ接ぎしたりしてプログラムを作ったりしました。現代のケイタイやパソコンは聞いたたり、話したり、見たりの最低限度しか操作できません。メールのやりとりもほとんどしない最近では幸せなのか、負け惜しみでしょうか。自分の耳で聞いて、言葉で話す、できれば相手の顔を見て、目を見ながら話す。相手の気持ちも伝わり、こちらの気持ちも伝えられる。このことを忘れてしまっているのではな

らうか。パソコンやケイタイは非常に便利ではあるが、何かが失われていっているのではなからうか。

民間紛争解決手続き(A DR)等も各県で支援センターを作らなければ処理できないのでしょうか。お互い話し合せて、譲り合せて紛争としないことはできないものでしょうか。みんなでもつと人間らしく、心にゆとりをもてる社会にするにはどうしていったら良いのでしょうか。そんなことを考えながら孫娘に無理やり話しかけている今日この頃です。

第八回 KAKA 笑の会報告

大本山總持寺秋の精進料理

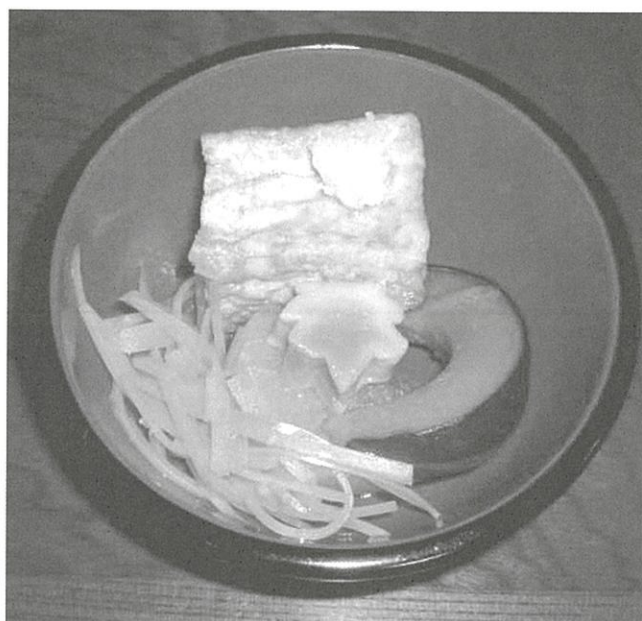
精進料理を、の声に心え、秋の食材を用意し、大本山總持寺典座・小金山泰玄老師を再度お迎えいたしました。お昼前に到着されて、食材をご覧になるやその場で献立を作ってしまう老師。その素晴らしいメニューを

- 献立**
- 一、限元(天竺)の天竺煮
 - 二、茄子と水菜の御浸
 - 三、根香の苗(事刺)と大根
 - 四、大根と人参、柿の膽
 - 五、生湯茶
 - 六、厚揚げと大根下ろし
 - 七、蒸し胡瓜、胡根和え
 - 八、滑子の葉天壽也
 - 九、糸瓜の和え物
 - 十、松茸御飯・豆腐と若菜汁物
 - 十一、里芋共和え
 - 十二、カネモチと人参と生麩の煮物
 - 十三、蓮根と高野豆腐の揚げ物
 - 十四、芋茎と乾瓢の吸い物
 - 十五、胡麻豆腐
- 以上



ご紹介いたしました。盃一杯、用意した食前酒も好評でした。会場からは、小金山老師に、レシピについての問い合わせ、また十日町からはるるのおいで参加者の

感激の声、素材を大事に扱って優しい味わいがとてもよい等のご意見が寄せられました。老師は質問に心えられて「素材の扱い、鮮度が重要」「隠し味として砂糖を少々加える」など、お



お別れ

(平成十八年八月末～十二月末)

● 日山 仁様 八月廿一日寂 長岡市新保

● 片山 一郎様 九月七日寂 長岡市美沢

● 板山 静江様 九月十一日寂 長岡市山田町

● 本間 綾子様 九月十三日寂 東京都大田区

● 小林 シズイ様 十月廿九日寂 長岡市新組

● 前田 惣一様 十二月十一日寂 長岡市呉服町

● 藤島 義行様 十二月十二日寂 東京都西東京市

ご冥福をお祈り申し上げます。

役立ち情報にメモを取る方もありました。前日から準備いただいた実行委員の皆さん、当日飛び入りでお手伝いに加わっていたいただいた有志の方々のご尽力に、感謝いたします。

旬歌 愁灯

【その十一】

お正月

加瀬由紀子

夜通し窓を揺らした木枯らしが過ぎて、寒さに震えながらの朝を迎える。東山方面は、昨日までの沈んだ褐色を雪化粧に変えて陽に輝いている。うっすらと路面に雪のある十二月の出勤風景は、渋滞に追い討ちをかける。集団登校の生徒たちのカラフルな防寒衣も、どこかあわただしい。

「もう幾つ寝るとお正月」冬休み、クリスマス(キリスト教徒でもなかったのだが)、大晦日、お正月と続く楽しみを指折り数えた頃はいつだったか、子どもたちの歓声にふと思いをめぐらす。定年を控える団塊の世代ともなれば、歳月の流れの速さはあつという間で新年が不安でさえある。「今年の年越しはどこの国？」とよく尋ねられる。家族でまとまった休みが可能なのは、年末年始とゴールデンウィークぐらいなの

で、海外へ出かけた年もかなりあった。我が娘などは、高校受験で年越しを長岡で迎えた年まで、おせち料理とはバイキングのことだと信じていたようで、年末年始を安ホテルに滞在した影響に愕然としたものだ。

国内では、年末を奈良や京都で過ごしたことがあった。歩けるから、と断わる母を車椅子に乗せ娘と三人、新潟空港から伊丹へと向かう。みぞれ降る暗い街から明るい陽射しの地へと、西高東低の気候を実感できるのは面白い。

奈良の大晦日の見ものは何と言っても東大寺であろう。二月堂へ向かう途中の鐘楼では、一般客にも除夜の鐘撞きを開放していてありがたい。国宝の南大門から中門へと続く参道沿いには、いくつも篝火が焚かれ押すな、押すなの参拝客の吐く白い息を赤く照らす。

そしてお目当ての大仏殿だ。お盆の八月十五日と元日零時から、の二日間だけ、金堂正面上部の扉が開放された。翌日は赤い鳥居を幾つもくぐって春日大社にお参りしよう。興福寺、法隆寺、薬師寺と世界遺産の寺々を巡って阿修羅像など仏像を

十年の時の流れを越えて巨大な大仏坐像に脈々と捧げてきた人々の祈りに、誰もが心を打たれるはずだ。正月は赤い鳥居を幾つもくぐって春日大社にお参りしよう。興福寺、法隆寺、薬師寺と世界遺産の寺々を巡って阿修羅像など仏像を



れ、光り輝く盧舎那大仏のお顔を拝むことが出来る。延べ二百六十万人の汗の結晶、天平から今に至る千二百六

鑑賞するもよし、奈良町でショッピングするもよし：さて、京都はどうか。お正月の準備に忙しい四条通り

を抜けて、哲学の道を通り、こじんまりとした法然院へ向かおう。何よりも観光客の少ないこの寺の庭は乙女チックとでもいおうか、「かわいい」庭と演出に心が和む。芸術に理解の深い住職は、コンサートやシンポジウムに境内を開放(安善寺に対抗?)している。

さらには北へ足を延ばして詩仙堂をめざそう。小堀遠州と並ぶ、石川丈山が造った庭園は、四季折々の花が咲き乱れ、刈り込みも清しく鹿(しし)おどしの音も心地よい。この回遊式庭園は山茶花や椿が雪に映える冬が一番美しい。

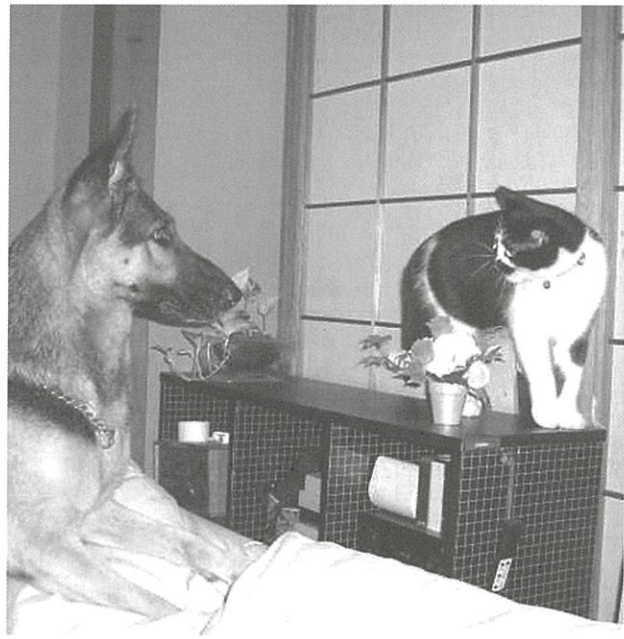
京都の大晦日のハイライトは、祇園の突き当たり、八坂神社のおけら詣りだ。御神火から移した火縄を、消えないようにくるくる廻しながら持ち帰り、雑煮に使用し、一年間の無事を願う行事である。こちら歩行者天国となった四条通に参拝客がどつと繰り出し、夜明けまで騒然となるのも大晦日の一風景である。

もつとすさまじい人波は除夜の鐘で有名な知恩院へと続いている。日本一大きい鐘を十七名の僧たちが子綱を持ち、掛け声と共に撞くのだが、その迫力に圧倒される。鐘の周囲を僧侶たちが囲み、誦経の声、鐘の音が相まって底冷えの京の夜空へ吸い込まれてゆく時、信仰薄い者も思わず手を合わせて幸を願うのは不思議である。この鐘撞きをひと目見ようと朝から行列を作るのだが、車椅子の母を伴った私たちが警備の職員さんは優先してくれて先頭で見ることができたのは何とも運がよかった。さて、京都、奈良のにぎやかな年越しもいいが、しんと雪の降る長岡の大晦日を、今年はずり味わってみるつもりだ。大晦日夕方からこの一年最後のお経が安善寺本堂・稲荷堂であり、元旦午前零時から稲荷堂で大般若(約三十分位)、午前五時から本堂・稲荷堂でご祈祷がある。

賑やかです



ペコのひとりごと



あけましておめでとうございませう。

昨年のは暖冬で比較的凌ぎやすい日々が続き、時折洗濯物も外で干せるような日も多かったので、お母さんが二階に上がって来て窓を開けるので私もその窓から入る日差しに誘われてペランダにゆつくりと出て行くのですか、必ず何処か

らともなく鈴の音が聞こえ、八月から私共の仲間入りをした「ボブ」が現れ、私より先に外に出て行ってしまします。

「借りてきた猫」とは言いますが、最初は本当に可愛くて遠慮しがちで、何をすることも私より一歩下がっていたのですが、最近では我物顔で、お母さんが三匹の容器に

それぞれ餌を入れてくれるのですが(私はもう固いものが食べられないので軟らかい餌になりました)香りが違うのが解るのか、自分のは一口二口食べて、あとは私の傍らに来て、私の残すのをジーンと待っているのです。お母さんの「ボブ自分の食をなさい！」と言う声など聞こえないのか、今まで十八年間ものんびりと食事をしていた私には食べづらくて、残してその場を立ち去るのですが、待ってましたとばかり私の残した餌を全部食べてしまします。

若いので高い処をピョンピョンと飛びはね、障子は爪跡が生々しく「暮れは障子貼りをしなくとも良いと思つたのに！」と嘆息が聞こえて来ました。私同様にサクラも相当ボブの存在がプレッシャーになっているようで、ストーカーみたいにボブを追い回していま

す。そうするとボブは両手を上げてサクラを威嚇し、サクラの鼻の頭は血が滲んでいる事が度々、一度は鼻の処に白いボブの爪が刺さっていました。お母さんも「こんなにも多くのペットに囲まれて生活すると思わなかつたわ!!」と静かな一時が欲しいようすです。

今年のお正月は二番目のお兄ちゃんが就職して始めて四年ぶりにお寺でお正月を迎えました。高校を卒業してからずっと関西に住んでいるお兄ちゃんには、言葉もすっかり関西人になってしまいました。三ケ日は、しっかりとお袋の味を堪能しご満悦そうでした。今年も元気に頑張ってくれるものと私も期待しています。

ニヤーン

編集 謹賀新年

読者の皆様明けましておめでとうございませう。今年も宜しくご愛読下さいますようお願い申し上げます。

長い間広報に携わって来ますと少々マンネリ化してしまいます。その結果、皆様の反応が鈍くなるので困ってしまいます。この広報は一方通行にならないよう、出来るだけ皆様のご意見・ご感想また体験談を載せています。ご協力・ご参加賜れば有り難いと思っております。内容は宗教に関係なく何でも発言下さい。但し、個人的な中傷や政治に偏った内容は、勘弁願いたいです。昨年は皇紀2666年の年でした。この年はいろいろな問題・矛盾が表に出る

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問(編集部や住職が答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと。

年なのだそうす。(理由は良く判りません)結果からして、確かに子供の問題・社会の問題・地球規模の問題と大変な問題が提起されました。根本は個(自己)の確立の問題ではありませんが、教育の大切さ、地域の大切さが問われたことと思えます。私達は見て見ぬ振りをしていたのではないでしょうか! 家族・近所・地域・国・世界・地球と全てに通じ皆大切な絆があることを忘れたのではないのでしょうか。教育は元に戻すのに五十年はかかります。

戦後の日本は変えられませんでした。良きも悪しきも変ってきてしまいました。歴史を語り文化を継承し本来の日本人の美しさ・躰・優雅さを復活させないと本当に暗黒の日本が出来てしまいます。新年には日の当たる明るい未来が見える国・地域・近所・家族づくりに励まねばならないと覚悟を決めます。皆様も出来ることから一緒に進めようではありませんか。

(小林国一 拜)

運命というものは、人をいかなる災難にあわせても、必ず一方の戸口をあけておいて、そこから救いの手を差し伸べてくれるものよ。—セルバンテス「ドン・キホーテ」—

第三十七号、春号は平成十九年三月十日(土) 発刊予定です。